

「生徒が語彙を豊かにする」授業づくり —生徒の学びの姿から—

小沢 正太郎 高度教職開発コース

キーワード：語彙を豊かにする 授業づくり

1. 研究動機・研究課題

日頃生徒と生活を共にする中で、語句の使い方に首をかしげることが少なくない。授業、それ以外の場面で「それってつまりどういうことですか？」と聞き返すこともしばしばある。加えて、「その表現や語句は適切なのか」と思うことも多い。「やばい」という語句が象徴するように、多義的な機能をもつ語句を様々な場面に当てはめ、大意が伝わればよいという表現やコミュニケーションの在り方も目に付くようになった。学習指導要領国語編平成29年告示（以下H29CSとする）においても、語句の量を増やすことと、語句についての理解を深めることの二つの内容を盛り込み、語彙指導の改善・充実を掲げている。これまでの自分を省みると、たしかに語彙指導はしてきたはずだが、生徒の語彙が豊かになったか、と言われるとそうした実感はない。そこから、具体的にどのような授業を構想すればいいのか、生徒はどのような過程で語彙を豊かにしていくのか知りたいと願うようになった。そこで、本研究では、H29CSの「言葉の特徴や使い方に関する事項」に則って授業を構想・実践し、そこで得られた語彙指導における授業づくりの重点と、語彙を豊かにしていく生徒の姿を考察することを目的とし、本研究テーマを設定した。

2. 研究内容・研究方法

2.1 研究内容1 「生徒が語彙を豊かにする」ための授業づくりの重点は何か

H29CSに則り、語句の量を増やすことと、語句についての理解を深めることを目標とした授業内容を構想しようと考えた。塚田（1998）は、「語彙を豊かにするとは、新しい語を獲得したり既知の語の意味を変容させたりすることであり、学習者個人の既存の語彙体系こそが語彙の獲得拡充過程の中心的ファクターである」としている。それを踏まえて授業を構想・実践し、「生徒が語彙を豊かにする」ための授業づくりの重点は何か明らかにしようと考えた。具体的な取り組みは次(1)、(2)の通りである。

(1) 「言の葉ノート」の取り組み

語句の量を増やすことの取り組みとして、興味のある語句を、一人一冊のノートに日常的に集める「言の葉ノート」の実践を行った。生徒が主体的に語句を獲得していくことで、自らの語彙体系にある語句と新しい語句を結び付けながら、使うことのできる語句の量を増やしていくと考えた。また、集めた語句を共有し、使う場も設定することで、語句への関心をさらに高めたり、定着を図ったりするようにした。

(2) 語句の捉え方の差異を伝え合う授業の構想・実践

1年次に「ぼんやり」と「ぼやけた」の違いについて追究した際には、生徒がそれぞれの知識や言葉に対する感覚を共有し、語句の使い方に対する認識を深める場に出会うことができた。それらから、言葉を使った創作活動や、意図的に語句の比較をしたり、個々のとらえ方の差異を共有したりする活動を設定することで、さらに語句の使い方に対する認識を深めることができると考えた。

2.2 研究内容2 生徒がどのような過程を経て「語彙を豊かに」していくのか

「語彙が豊かになる」とは、たくさんの語句を知り、適切なきに適切な語句を使うことができる状態にあることを指すと考えている。これまでの語彙指導では、語句の量を増やすことはできても、語句についての理解を深めることが足りていなかったがゆえに、それを日常の中で使えるようにするところまでは至っていなかったと考えた。生徒がどのように語句についての理解を深めていくのか、実践の中での生徒の姿から考察する。

3. 実践研究の概要と実際

3.1 実践事例1「言の葉ノート」の取り組みから

(1) 実践の概要

平成30年8月より、自身が担任するクラスを対象として、「言の葉ノート」の活動を始めた。始めるにあたり、次の内容を記述していくよう確認し、活動に取り組み始めた。

- ①新しく知った言葉
- ②その言葉の意味（新しく知った意味）
- ③いつ、どんなときにそれを知ったのか
- ④なぜその言葉に興味をもったか
- ⑤他にも、こんなときに使えそう…など

生徒の「言の葉ノート」の一部

(2) 実際の様子

「言の葉ノート」で調べた内容を、学級で何度か共有した際に、「他の人と話したりして見て、自分が知らないものなどたくさんあり、とてもおもしろかった。けれど、まだまだ世の中にはいろんな言葉があり、自分が知っている量が少ないということを痛感した。」「調べている言葉にもアイデンティティーが表れていて面白かった」などの振り返りがあった。そうした振り返りから、生徒が「語句の知識が増えることの喜び」「知らない語句に出会う面白さ」「使用語彙と理解語彙の違い」「一人一人の着目する語句の違い・自分の語彙獲得の傾向」などを実感し、これまで語句調べなどに対して後ろ向きだった生徒が、語句を獲得することに前向きになって取り組んでいることが窺えた。また、授業で取り上げ、友と共有する機会を設けることで、語彙を広げるだけでなく、一人一人の着目する語句の違いにも目を向ける生徒の姿もあった。

(3) 実践事例1の考察

「言の葉ノート」の効果を生徒自身が振り返る自己評価を行ったところ、これまでの取り組みを通して、7割近くの生徒が言葉に対する興味・関心の高まりを実感しているという結果になった。また、生徒の振り返りからは、「これまでは見ていなかったニュースや新聞を見るようになった」、「これまでは気にならなかった語句の用法に対して敏感になった」、「読書や会話の際に獲得した語句を使用するようになった」など、生徒の生活に変化が表れていることが分かった。教師から見ても、登場人物の心情を読み取る際や筆者の主張を捉える際などに、一語一語に着目する姿が多くあることなど、語句に対する意識や、語句を獲得しようとする意欲の向上を感じさせる姿が見られている。これらは、「言の葉ノート」によって、日常的に語句に注意を払う習慣が身に付き、それが身の回りの語句に対して敏感になるなど、姿勢や意欲の面での向上につながったのではないかと考えられる。

自己評価の結果
「言の葉ノート」を通して、普段の「言葉に対する興味・関心」が高まったか
・そう思う・・・・・・・・・・5人
・ややそう思う・・・・・・・・20人
・どちらとも言えない・・7人
・あまりそう思わない・・4人
・そう思わない・・・・・・・・1人

3.2 実践事例2 生徒の問いをもとにした対話活動

(1)実践の概要

1年次に行った連句づくりを通して、生徒は語句に対する関心を高め、人によって一つの語句に対する捉え方の差異があることに気付いた。さらに、その捉え方の異同を伝え合うことで、語句に対する認識を深める姿があった。そこから、「なぜ語句の捉え方の差異が生まれるのか」といった差異の背景（知識や体験など、生活経験に基づくもの）にまで目を向け、それらを共有することで、生徒が実感を伴って語句の捉え方を更新していったり、使いこなせるようになったりするのではないかと考え、単元を構想した。

(2)実際の様子（Mさんの姿から）

単元冒頭では、「言の葉ノート」の中から、「印象に残った言葉」として書き記したものを取り上げ、共有する場面を設定した。ある言葉に自分は共感したが、他の人は共感しない。そんな事実を出発点とし、「話し手や受け手と言葉にはどのような関係があるのだろう」という問いを立ち上げた。そこから、「言葉の力（大岡信 国語2 光村図書）」の読解を通して問いに対するそれぞれの考えをもち、さらに追究したい問いとして「私たちにとって美しい言葉、正しい言葉とは？」を全員で定め、学級全員による対話を行った。Mさんは、対話後に次のように考えを綴った。

言葉の定義が人によって違うから、今日みたいに意見が違うんだと思う。「単体の言葉」と言っている①筆者は、言葉を字引に載っている単語とか文章とかだと思っているんだと思う。②私は、話しているひとが言ったときに言葉だと思う。③Yさんとかは、聞き手が受け取っているときに言葉だと思っているんだと思う。

Mさんは、対話を通して、「言葉」そのものの定義を再認識していた。友の考えを受け、「話し手が発したときに言葉になる」という自分の考えを自覚し、言語化することができたと同時に、友の考えを否定することなく比較し、客観的に捉えることができていた。ま

た、この単元を通し、「言葉」そのものの捉え方の更新だけでなく、「美しさ」といった、話題から派生した抽象的な語句についても、机上の空論ではなく、自分の体験や感覚を基にした言葉で語り、語句に対する認識を深めていくMさんがいた。

(2) 実践事例2の考察

学級全員による対話によって、生徒が「言葉」「美しさ」「正しさ」などの語句の捉え方について語り合い、その異同について理解を深めていく姿が見られた。他にも、『正しさ』は文法的で、『美しさ』は情動的なものでは…」と、辞書の枠を超えた感覚的な考えや、自身の体験を交えた考えも出され、その語句に対する認識を深めていく姿もあった。また、発言する生徒の何とか考えを伝えようと言葉を紡ぐ姿から、学級全員による「対話」は、語句の認識を深める場でもあり、自分の語彙を最大限に活かし、語句を使う場としても有効であると考えた。

4. 研究の成果と課題

生徒に「自分の言葉の使い方」に関する自己評価を行ったところ、使用語句の変化を実感する生徒が半数を超えていた。「伝わりやすい言葉を選んで話すようになった」「新しく知った言葉でも、ちょっと使ってみようかな、などと思うようになった」などが、生徒からは挙がった。これらの要因として、「言の葉ノート」を通して、語句を集める習慣が身につく、語句に対して敏感になったことが挙げられるだろう。また、自発的に集めた語句だからこそ、それらが使える語句となっていくことも考えられる。加えて、授業実践を通して、語句の捉え方が一様ではないことを知り、語句に対する認識を深めようとする姿勢が生まれてきていることも、その一端を担っていると考えている。

自己評価の結果
自分の使う言葉が変わった・意識して言葉を選ぶようになった
・そう思う・・・・・・・・・・9人
・ややそう思う・・・・・・・・15人
・どちらとも言えない・・11人
・あまりそう思わない・・2人
・そう思わない・・・・・・・・0人

こうした生徒の学びの姿を通して、まずは生徒が日常的に語句を意識する環境を教師が作り、生徒自身の語彙を豊かにしようとする意識を涵養する土台作りをすることが必要であると感じた。その土台の上に、生徒は語句を獲得したり、語句の意味や使い方に対する認識を深めたりしていき、そして使いこなせる語句を増やしていく。そんな「語彙を豊かにする」プロセスがあることも見えてきた。

しかし、「語句の量と質の高まり」をどう評価すればよいのか、ということについては課題が残る。教師目線での評価、生徒目線での評価、いずれも取り入れながら、評価方法を模索していきたい。それらを通して、『言の葉ノート』から見る自分の語彙体系など、生徒一人一人を掘り下げた分析も可能になるかもしれない。さらに実践を重ねていきたい。

文 献

塚田泰彦・池上幸治(1998). 『語彙指導の革新と実践的課題』 明治図書
『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』 文部科学省